

成章館と武芸

白 井 省 三

1. はじめに
2. 創 設
3. 教 育
4. 藩主康直の武芸検分
5. 武芸関係職員
6. 各芸開閉期間
7. 末期の状況
8. む す び

1. は じ め に

成章館とは現愛知県立成章高等学校の前身である田原藩の藩校成章館のことであり、文化7年9月17日より明治4年7月14日廃藩置県まで約61年間存続した。

本稿においては、剣術、槍術は、原文に劔術、鎗術とあるものの他は一般に使われている剣術、槍術とした。兵杖の杖は仗との説もあるが原文の杖を用いた。炮術は鉄砲又は火術とも称したが炮術に統一した。

本稿においては、成章館における教育の中で、武芸がどのような位置付けをされていたか、又どんな流派の武芸がどのような形で課せられたか、その盛衰はどうであったかを明らかにしようとするものである。ただ、関係資料が明治4年の廃藩の時及び明治28年田原中部小学校の火災により失われてしまったので、主として華山文庫（田原町教育委員会管理）に収蔵されている田原藩日記類のみに依らざるを得ず、いきおい根本的な部分において決め手に物足りなさのある点をあらかじめおことわりしておく。しかも、成章館についての研究は僅かに愛知県史：田原町史に、その一端が

照会されているのみである。

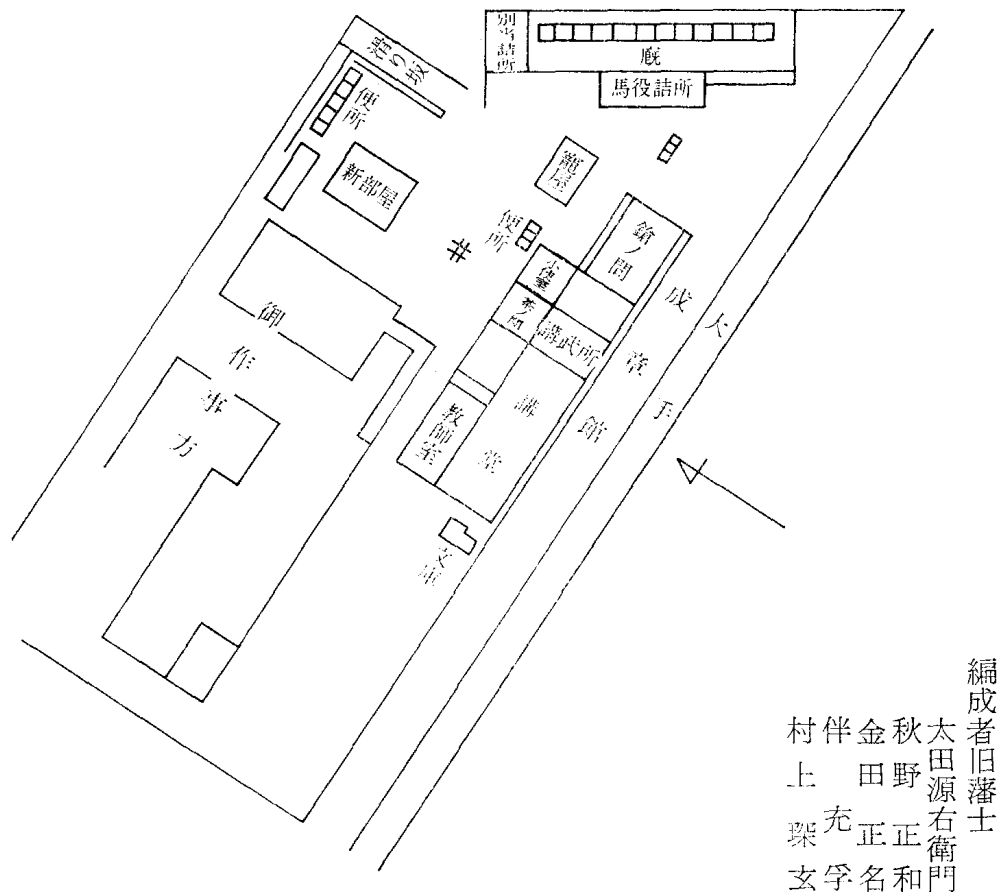
2. 創 設

成章館は田原藩士萱生玄順の献策により文化7年9月17日に開館した。玄順は代々儒医を以て藩主三宅氏に仕えていた萱生家に安永元年生れた。玄順は医のかたわら家塾を開いて藩士に儒学を教えていたが、不完全な家塾教育では藩財政の危機にあたり人材養成の道に欠けることを憂え、諸藩の例にならい藩校設立の要を痛感して、しばしば藩当局に具申したが、財政難から容易にその実現を見るに至らなかった。

田原藩は寛文4年三河挙母から現在の愛知県渥美郡田原町の地に、渥美郡内24ヶ村、1万2千余石で入封して以来、石高に比して家臣多く、田原藩分限帖によれば常に370名～380名を数え、領地はやせ地が大半で、年貢も5公5民で実収は4千石程度であった。その上1万石クラスの大名は、大部分が陣屋であったのに田原藩は城持大名として格式高く、帝鑑の間詰めの時が多く、ために、交際費もかさんだ。これ等の事が藩財政を圧迫し、入封当時より財政上常に苦しんだ。宝歴12年には公務は勿論、家中の最低生活も保証出来なくなり、やむを得ず藩主自ら布告を出して、家臣から上士高7割引、足輕中間のような小禄の者でも1割半引の借米を申し渡しており、それでも足らず更に1割の引米を命じている。その他、享保2年には御用金2,960両を領内の庄屋郷村から借用しており、天明8年より享和3年に至る10数年間に宝飯郡為当村の竹本長三郎より7,600両、宝飯郡前芝村の加藤六蔵から3,000両を借金し、度々の返済要求にもかかわらず遂に返済していない。

ところが、この頃、将軍吉宗の享保の改革における文武の奨励、松平定信の寛政の改革における文武の奨励が諸藩に大きく影響して、たまたま藩政改革をせまられていた。諸藩が、教育により、その実を挙げんとして競って藩校を設立することとなった。田原藩においても幕命による海防上と窮乏せる藩財政の打開上、人材の養成を急務としたので、玄順の献策がようやく採り上げられ、康和が文化7年9代藩主となるに及んで、藩校の創

成章館配置図（明治44年図による） 韋山文庫蔵



設を見るに至った。当時、康和はようやく12才の少年であったので家老の間瀬氏をはじめとする重臣の決定によるものと思われる。

創設の場所は田原城桜御門前の追手にそって（現在の田原中部小学校の東側半分）玄順の親類にあたる萱生源左衛門が土木建築を担当して文化7年9月12日に落成した。規模は講武所，倉の間，馬場等の武芸所，講堂，教師室，茶の間，別当詰所，馬役詰所，厩，小使室等が設けられた。文政8年11月5日には文庫も落成し，廃藩当時は総坪数 700坪，建坪約80坪の規模であった。

開館は文化7年9月17日で，開館式は藩士総出席で行なわれ，玄順が大学を講じた。始めは稽古所又は学館と呼ばれていたと言われている。田原藩御用人方日記の記事としては，文化8年8月1日の条の釈菜の記事に，はじめて成章館の名称が出ていることにより，この頃成章館と呼ばれるよ

うになったと一般には考えられている。ところが、これより2日前の文化8年7月30日の康和直筆の成章館扁額（実物は現存しない）によれば、表は「成章館」と書かれ、その裏書には、「康和公御12才御直筆爽旭先生庚午4月持参也。講師萱生玄順，劔術佐藤揮空，松岡直透，上条覚左エ門，土井喜左衛門，鎗術大島又蔵，柔術，居合，兵杖萱生源左衛門（当館御用掛り）工匠当所新町又五郎」とあり⁽¹⁾，従って成章館の呼称は開館前の文化7年4月以前にすでに決定されていたか，あるいは7月30日までの間に決定したことになり，従来からの文化8年8月説は誤りであることは明らかである。

なお，成章館の名称は玄順の撰によると信じられている。ところが明治初年の文部省進達書にある成章館扁額の裏書に爽旭先生持参也とあり，田原藩には爽旭先生なる人物はおらず，おそらく文部省進達書に爽鳩を書き誤ったか，手控えした岡田氏の写し間違いと思われる。爽鳩とは鷹見弥一右衛門定允のことで，藩主康和に仕え藩老として藩政に寄与するかたわら藩主に進講していた学者でもあったので，講師の玄順と相談の上定められたと推察される。

論語の公浩長

子在陳日，帰与帰与，吾党之小子狂簡斐然成章，不知所以裁之より採ったと思われる。

3. 教 育

成章館教育の目標は，文武兼備の士を養成し，田原藩の隆盛に役立つ士と強兵となるべき者（卒族）を養成するにあったので，文学（儒学）と武芸の両道を兼ね実施した。

開講にあたって玄順の起草になる門弟心得が文化7年9月藩主康和の諭達書として出されている⁽²⁾。それによると

1. 御学校入門（9才入門）の輩，18，9才迄に四書五経素読卒業のこと
1. 25才迄に諸武芸は目録が許さる様上達有之事

とあり

修むべき到達目標が明示されている。門弟心得には9才入門となっているが実際には8, 9才で入門したようで、修業年限も一定でなく、老年に及び年とともに出席しなくなり退学する習わしであった。そして田原藩士は上, 下士ともに成章館で学んだが、士族と卒族は文学、武芸ともに別に学び、武芸では卒族は柔術、兵杖、炮術、銃陣以外は学ぶことを許されなかった。ちなみに女子の入学は目的外であったので許されなかった。

創立以来の日課表は明治初年の文部省進達書写（崋山文庫蔵）学則は文化7年9月の藩主康和の諭達書によれば

日課表および武芸流派

毎朝未めいに始め5ツ時に終った

毎朝素読、文学を武術稽古前に修め

- | | | |
|---------|----|--------|
| 1. 6の日 | 午前 | 法蔵院流鎗術 |
| | 午後 | 小笠原流躰形 |
| | 夜 | 直義流居合 |
| 2. 7の日 | 午前 | 荻野流炮術 |
| | 午後 | 無比流兵杖 |
| 3. 8の日 | 午前 | 無念流劔術 |
| | 午後 | 直心流劔術 |
| 4. 9の日 | 午前 | 高麗流木馬 |
| | 午後 | 日置流弓術 |
| | 夜 | 直義流柔術 |
| 5. 10の日 | 午前 | 高麗流馬術 |
| | 午後 | 文学 |

但し槍、馬術は士以上の業で、兵杖は卒に限った。

日割以外の余暇にも文武の別会が行なわれ、午前文学のないときは算術、時には柳生流三ツ道具（サス又、袖ガラミ、突棒）などが課せられた。

この日課表より推して、文武両道といっても武芸稽古の割合が高く、実際には武芸が重んじられたものと思われる。

学 則

1. 諸芸術稽古，正月17日より相始，12月20日を限り可致閉会事
1. 毎朝素読は朔日，15日可致休会事
1. 2月，8月釈菜之砌は前日より合両日可致休会事
1. 上巳，端午，七夕，八朔，重陽可致休会事
1. 三社之祭日（註，神明社，八幡社，蔵王権現）前日より合両日可致休会事
1. 各芸一芸而已可致休会は其師範之者差図によるべき事
1. 穩便並諸鳴物停止之節は可致休会之事右之条々可相守事

文化7年正月

執 事

とあり

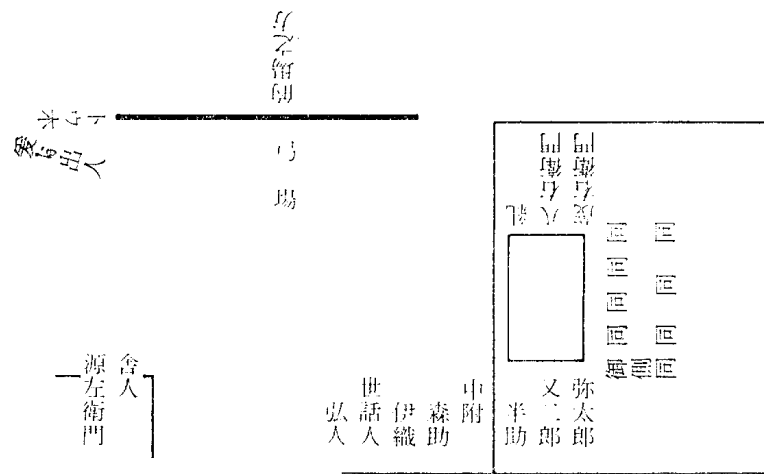
文化7年正月執筆とあることより推して，すでに開館前に必要な諸規則，心得等が定められていたものと思われる。

試験は儒学については毎月末に試問を実施し，その成績を館内に掲示し，文武の大試験を春秋の二度藩主，重臣の臨席のもとに実施し，優秀な者には賞を与えた。能力もさることながら出席を重んじ田原藩御用方日記（崋山文庫蔵）天保6年正月定之の条によれば，成章館諸芸，皆席，世話役，褒美規定でも，皆席者には，年数によりそれぞれ規定による褒美が与えられた。不心得者もあったとみえて田原藩御玄関置帳嘉永6年8月17日の条にみるが如き学徒不行跡にたいして警告が出されている⁽³⁾。

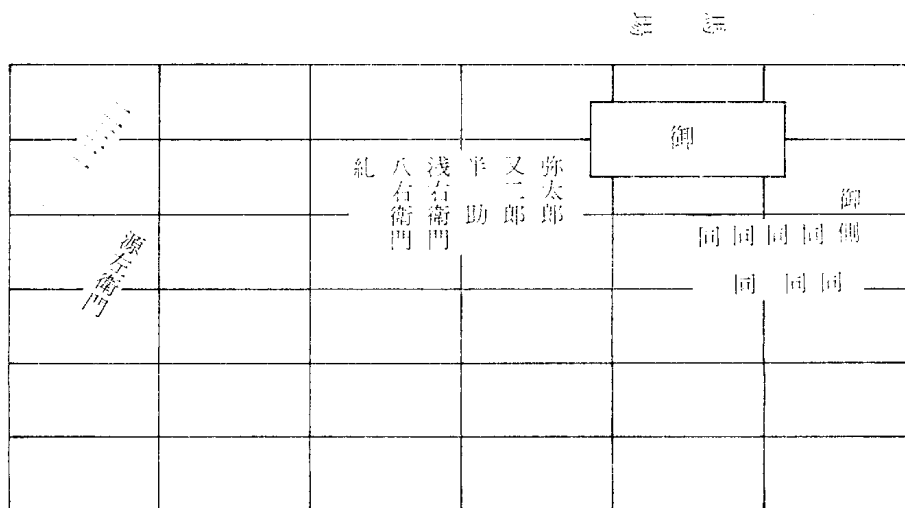
4. 藩主康直の検分

歴代藩主とも成章館の教育に意を用い春秋二度の大試験を検分したが，中でも11代藩主康直（文政10年より嘉永3年まで）は特に成章館の教育に深い関心を持ち，しばしば成章館をおとずれており，天保7年10月の如きは16日，17日，18日，19日，21日，22日の6日間も文武の検分をしている。田原藩御用方日記（崋山文庫蔵）天保7年10月17日の条により武芸検分の様子を見ると

馬術御改の会場図



馬術御改の会場図



初候様御用人伺之上
 二村三三へ申達候
 相済候御礼
 申出弥太夫御座
 合有出候
 注二村三三は馬術指南

天保7年10月17日 晴

1. 今日も九ツ時御供揃ニテ弓馬為御覧成章館へ被為入候御供御近習村松百度，川澄肇，佐野麻吉，永田千吉，御納戸木下半外御医師鈴木愚伯，御用人市川茂右衛門御草り取御坊主三浦寿三参候，弓馬之者，成章館掛り等鈍遣場所ト在番部屋之間へ御出迎御玄関前ノ弓場御覧所へ御着座御年寄弥太夫，又次郎，半助，御用人八右衛門御目付糺弓場ニテ平伏御座付之上初候様指南伊織へ御用人伺之上申達ス中付御右筆出ル臺之例ノ初一順ハ姓名呼上候三人立数三立，御奉公人相済，御目見へ部屋住鈴木司馬介より只部屋住相済。御徒士中田兵助是射手日記ハ一帳ニ認候相済，萱生源左衛門是ハ射手日記臺人別帳ニ候相済，御透見小役人足輕方但初一通リハ名斗呼出候相済，伊織，舎人も御礼申上ル，弥太夫御取合有之成章館御座被為遷候
1. 馬術御覧相済御馬召候間何れも引取候様御沙汰ニ而引取茂右衛門御近習御納戸御馬役残り御乗馬済，御帰城被遊候

とあり

次の如き会場図も付記されており，当日の検分の有様がよくわかる。文中にもある如く小役人，足輕等は廉れを掛けて透見したとあり，その差別は徹底したものであった。

なお，文中に伊織とあるは弓術指南の雪吹伊織，鈴木司馬介は素読世話役，萱生源左衛門（七郎）は柔術，劔術，兵杖，居合指南，鎗術世話役，舎人とあるは弓術劔術世話役の三浦舎人，糺とあるは後に槍術，柔術，居合指南となる渥美九平（弘化4年紀を九平と改名）のことである。

5. 武芸関係職員

武芸関係職員は学校掛り（講主，成章館世話，あるいは学校総裁とも称した）1乃至2名，各業指南は1乃至2名，世話役は1乃至10名が置かれ，時によっては世話役の置かれなかったこともあった。安政3年の田原藩日記（華山文庫蔵）によると，兵学指南雪吹伊織，世話役なし，劔術直心流指南佐藤皆空，世話役大島又蔵，萱生健治，鍋木矢六，小山市兵衛，川澄

安治，萱生彦四郎，無念流指南村上財右衛門（安政2年定平を財右衛門と改名），世話役近藤勇，夏目善左衛門，松坂与三郎，佐藤松次郎，鎗術指南渥美九平，世話役なし，弓術指南雪吹伊織，世話役なし，西洋流炮術（高島流ともいう）指南村上財右衛門，雪吹伊織，世話役川澄訓兵衛，渥美源之助，柔術指南渥美九平，世話役萱生健治，川澄安治，萱生彦四郎，居合指南渥美九平，世話役萱生健治，川澄安治，萱生彦四郎，兵杖指南川澄安治，世話役萱生彦四郎，馬術指南村松清兵衛，川澄訓兵衛，世話役，佐藤松次郎，木馬川澄訓兵衛となっており，皆本職よりの兼務であったので，わずかな役料が与えられた。天保4年の三宅家御日記抄（華山文庫蔵）によれば下記のように記されている。

文武教授被下御定

- | | |
|---------|-------|
| 1. 三俵ツツ | 文学，兵学 |
| 1. 二俵ツツ | 同諸芸 |
| 1. 二俵ツツ | 成章館掛リ |

右之通格式之高下不拘被下置候

当時厳しい引米を実施していた田原藩としては，この程度の役料しか出せなかったのであろう。

武芸関係の職員は文政7年9月17日の開館より明治4年7月14日閉館に至る約61年間に，総実数 136名で，内わけは一人二芸以上に渡る者が多いので剣術50名（二流に渡る者が多いので，直心流35名，無念流16名），槍術（18名），弓術（23名）柔術（24名），炮術35名（二流，三流に渡る者がいるので荻野流15名，西洋流24名，外記流1名），居合（19名），兵杖（17名），馬術（15名），兵学（2名），銃陣（27名），三ツ道具（1名）となっており，その数よりみて剣術，炮術，銃陣が多く，これからも，これ等の芸が重点的に課せられたことがわかる。しかも炮術の行なわれたのは天保8年より明治2年までの32年間，銃陣は天保14年より明治元年までの26年間にすぎない。海防上の必要からと銃器の発達により，古い武術はあまり役に立たなくなった為個人的な槍術，柔術，弓術，居合等から団体的な炮術，銃陣などの近代的な洋式の訓練にかわったものと思われる。

6. 各芸開閉期間

各芸は終始一貫して課せられたわけではなく、各芸によりそれぞれ異っており、時代の流れを反映している。以下各芸の開閉期間を述べれば

柔 術

文化7年開館の時より萱生源左衛門を初代指南として明治3年まで。

剣 術

直心流は文化7年開館の時より佐藤揮空、松岡直透、上条覚左衛門、土井喜左衛門を初代指南として明治4年3月まで。無念流は天保8年村上定平（財右衛門）を初代指南として慶応2年まで

弓 術

文化9年に小川彦十郎を初代指南として慶応3年まで

馬 術

文化9年に岡本九太夫を初代指南として明治3年まで。

槍 術

文化7年開館の時より大島又蔵を初代指南として慶応3年まで

居合・兵杖

文化7年開館の時より萱生源左衛門を初代指南とし、居合は元治元年まで、兵杖は慶応2年まで

炮 術

萩野流は天保8年井上奎衛（岡崎藩士）を初代指南として嘉永2年まで、外記流は天保8年1ヶ年のみで雪吹伊織指南、西洋流は天保14年村上定平を初代指南として明治2年まで。

銃 陣

天保14年に二村二三二を初代指南として明治元年まで

その他卒族には柳生流三ツ道具が随時課せられた。

7. 末期の状況

成章館の最盛期は文政4年から慶応3年くらいの間で、諸芸大いに興隆

した。しかし田原藩御玄関置帳の嘉永6年12月4日の条にみる如く、海防上の見地から、その防禦作として炮術、鎗術、剣術に出精する様、指示が出され⁽⁴⁾ 成章館においても、前記三術が重点課目とされるようになった。

明治元年頃より武芸は衰退し、居合は元治元年まで、兵杖は慶応2年まで、弓術、槍術は慶応3年までで以後は出席者無く、会日が無くなってしまった。田原藩公廨録の明治3年1月12日の条によると、黒川原調練、剣術、追手調練、黒川原的射、馬術、捕縄が課せられているが⁽⁵⁾、主たるものは銃陣となり、明治4年には剣術も出席者なく、指南の冨田一は3月22日官禄を返上して非役となった。そして7月14日廃藩置県の令が出て、藩校成章館は自然廃校となった。

8. む す び

武芸の位置付けは開館当時は文武兼備を旨とし、文化7年9月の藩主三宅康和の諭達書によれば、1. 御学校入門の輩18才迄に四書五経素読卒業のこと、1.25才迄に諸武芸中一芸は目録許るさるる様上達有之事とあるが⁽²⁾、日課表より見る限り個人的武芸の課目時数多く、個人的武芸に重点が置かれていたと思われる。また開館当時は団体的訓練は課せられていない。ところが天保14年からは炮術も西洋流となり、団体的な射撃も行うようになり、更に天保14年には銃陣が加わり団体訓練をするようになった。明治初年には田原藩公廨録明治3年1月12日の条にもあるように⁽⁵⁾、個人的な武芸は剣術、馬術を除いて、柔術、槍術、居合、兵杖、弓術等の会日はなくなり、これに変わって炮による的射が重んぜられ、戦闘も個人技よりも団体戦の有利が認識され団体訓練としての調練の会日が多くなっているのが目立つ。これは銃器の発達により、その的中率が高くなった為に戦闘形式が至近戦から遠距離戦となり柔術、弓術、槍術、居合、兵杖等より炮術に勝ることを求められるようになったからと思われる。剣術が最後まで課せられたのは常に腰間に刀を帯び、武士の表芸とされたからであろう。

なお、本研究の主論ではないが、研究過程において成章館の名称につい

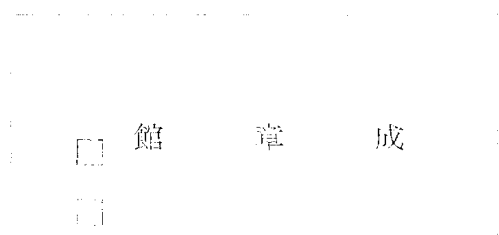
て新事実を発見し得た事は望外の喜びである。

(注)

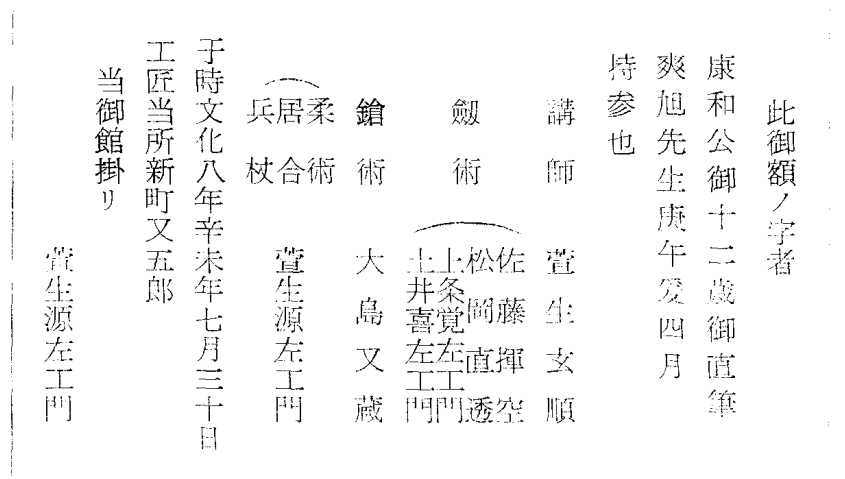
(1) 成章館扁額

文部省進達書写, 旧田原藩学制沿革取調要旨 旧藩士岡田氏手控(崋山文庫蔵)

額 面 之 写



同 裏 面 之 写



(2) 門弟心得(崋山文庫蔵)

文化7^{庚午}9月藩主三宅康和論達書

1. 御学校入門(9才入門)の輩18才迄に四書五經素読卒業の事

但卒業候ても経義不分明にては志不定, 志不定は士道難弁, 士道弁ぜざれば忠義の心得にても却て不忠に相成, 孝行の心得にても却て不孝に陥る事可有之, 譬へば孔子弟子再有季氏に仕へて忠臣なりしがしが, 為之聚劍して不益之と論語に見えたり。是忠臣たらんことを欲して却て不忠に成行きたる也。再有之学者すら如此の心得違あり。況して不学者をや。又書物を読まされても, 正直にさへすればよろしき事と心得たる者ありとも, 不学にして正直の道理の知れるものにあらず。たとへば微生高或人の為に醢を隣に乞ふが如し。又不学にして人情の修理を知ることかたし。たとへば再子子華の母の為に栗を請ふが如し。又文盲にても信義という徳業を知らず。たとへば父半

を盗む子之を証するが如し。以上数件皆道理暗きより起りたるものなり。凡士たるもの不学文盲にては士とは謂うべからず。たとへば武芸上達したればとて、忠孝の志不立時は却て武勇己が害をなすことあり。孔子曰好勇不学は無契也、乱世と教え給ふ故、武士たるものは道理を明めんことを立てることを先務となすべし。されば素読のみ卒業したればとて宜しと心得可からず。各無油断精出し略々経義道理を相弁得迄上達可有之事

1. 廿五才迄に諸武芸中一芸は目録が許さる様上達有之事
1. 主上を尊敬して忠節の心を相守可申事
1. 御用向又私用ありとも他行せし時は、君父を恥かしめざる様能く会得致すべき事
1. 父母に仕へて孝道を尽すべき事
1. 人の善事を慕ひ必ず己にも行ふべき事
但人の過を見ては伏蔵することなく、深切に告知し、相互に助合ふべき事
1. 礼儀を相守り、容儀を正して貴人の前は勿論、朋友の前にてても不作法の行は謹むべき事。
1. 人の短を害ふ事なく、己が長を誇るべからず。諸芸上達の人には仮令己より軽輩たるも賤しむべからず
1. 朋友の交に信義を相守り、互に偽り、欺く事かりそめにも有るべからず。一家中皆兄弟の如きものなれば、上下隔てなく相親睦、過惡あらば懇ろに告諫め善行を励み申すべき事
1. 他家は勿論家にも酒食を縦に成すべからず。大食大飲は病根なり。病者となり諸病相起れば君父に忠孝を尽し難し。且酒は狂薬にて無為と家を亡ぼし恥辱を受けたるもの古今歴然たり、よろしく省察すべき事
1. 童子輩行儀不正にして、人柄悪しく、武家の風俗を失ひたる者多し、能く行儀を相守り、師医師匠の教誨を忘れぬ様に致すべき事
1. 御学校出席の途中に限らず、親兄弟の為に使するとき、往来道筋神妙たるべし、市上の童子とは一際目立様立派たるべきこと
1. 女子供並に町在の童輩と同伴同遊堅く無用たるべきこと
1. 少年中は遊芸等たとへば囲碁、双六、乱舞、茶の湯、生花、香道、詩歌、連俳、等なり。尤本業出精なりとも嗜置くべき事
1. 部屋住亦童子の中諸芸相励み御奉公の基を仕立つる事肝要なり。然れば應對進退の礼節をも心得べき事なれば、其の奉公の基を教えらるる、人は即其の業々の師範なれば其恩儀は君父と同様なり。左すれば、元日五節句には其の師範々々へ賀謝すべき事、又朔望には起居安否となく伺候すべき事
右様の中に自ら成人の道を会得すべきものか
右之条々屹度相守可申、若し懈怠の者ある時は、其の場合に深切に相諭

し、教導補育有之、夫にて猶不致者は同列の者より一々文学指南方へ相達すべし、指南方には帳面一冊づつ製し置き達の趣旨善惡に限らず相議し、月の終には必ず師範に帳面を差出すべし。御用番の差図を以て褒貶あるときは文武奨励鼓舞の一助たらんか。

教 則

用書は孝経、四書、五経、蒙求、古文、唐詩選、歴史類にして授業の順序も大略如此にして幼稚者は専ら素読を授け、成人に及び輪読より輪講に及ぼし、毎朝未明に始め、五ツ時に終り、其他文武の余日を以て攻究する業は時に依りて変更あり

学 則

1. 諸芸術稽古正月17日より相始め、12月20日を限り可致閉会事
1. 毎朝素読は朔日15日可致休会事
1. 2月8日積菜の砌は前日より合兩日可致休会事
1. 上巳、端午、七夕、八朔、重陽可致休会事
1. 三社之祭日、前日より合兩日可致休会事
1. 各芸一芸而已可致休会は其師範之者差図によるべき事
1. 穩便並に諸鳴物停止之節は可致休会事

右之条々相守事 文化7年正月 執事

(3) 成章館学徒不行跡につき警告(崋山文庫蔵)

御玄関置帳嘉永6年8月17日の条

1. 大目付平山氏を以被仰出候、御書付左之通

文武修行之儀は兼々厚被仰出候得共、此節御中陰中ニ而諸芸事休会相成居候折柄於諸所不行跡跡之儀共有之趣、殊ニ於成章館其以不行跡之儀有之趣相聞以之外心得違之儀、畢竟平生諸芸修行之心得方不宜場合より御場所柄之弁義無之、斯迄心得違之儀等有之段不埒至極之事ニ候、以来は格別ニ志を立芸事而已ニ無之平日相互之応対言葉遣い迄も心懸、がさつ不行跡之儀等無之師範々々親々之場合ニ而も急度教訓可致候、万一此上心得違不行跡之儀於有之は御糺之上急度御沙汰之儀も可有之候間左様心得可申候

(4) 炮術、鎗劍術專要の指令(崋山文庫蔵)

御玄関置帖嘉永6年12月4日の条

1. 御物頭ヲ以御達有之候は、異国船防禦之義公儀よりも嚴重被仰出有之候ニ付、諸稽出精之義ハ勿論ニ候得共、右防禦ニ付而は炮術、鎗劍專要之義ニ候間、炮術之義は会数相増御家中老若共一同修行可有之候、鎗劍は日業ニ被仰付候間、30才以下ハ兩稽とも、30才以上は右兩稽之内一稽ニ而も宜敷候、尤極老之者ハ心得ニも相成候間出席斗ニ而も宜敷候、左様相心得可申、右致出精候者江ハ乍小分月々御褒美可被下候、専修行可致候 尤昨日之御達とは相違仕、御達直シ相成候間相印申候

(5) 成章館規則書（崑山文庫蔵）

公解録明治3年1月12日の条

文武日課

1. 6 休 日

2. 7 文 学

但シ教授役諸義，其後輪講，輪読可応其の才

3. 8 黒川原調練

但シ終日稽古之事

4. 9 劔 術

5日 追手調鑿

10日 黒河原的射

但シ終日稽古

追手黒河原稽古会日雨天並路地湿惡之節ハ於成章館兵学研窮可致候但於当館ハ九ツ時限リ之事

1. 6. 2. 7ヲ除ク外毎日 算 術

1. 馬術稽古之儀は教授前にて会日相定，日ノ出より五ツ時まで執心之者可致修行候

1. 算術之稽古は毎日晝前と定むと雖ども文学之会は除之

1. 卒験は毎月三旬之内，一会ツ 文学の日を以追補技相学可申候

但シ第一ニ捕縄並罪目譴糺等之業ヲ心懸ケ可申事